イスラーム宮廷絨毯の世界—ドーハ・イスラーム美術館の至宝が織りなす奇跡

はじめに

香港初の本格的なイスラーム美術展、「イスラーム宮廷絨毯の世界—ドーハ・イスラーム美術館の至宝が織りなす奇跡」では、イラン、トルコ、インドの絨毯をはじめ、陶磁器や金属工芸品、写本、宝石など10世紀から19世紀にかけての文化財を展示します。イランのサファヴィー朝（1501〜1736）、インドのムガル帝国（1526〜1857）、トルコのオスマン帝国（1299〜1923）という３つの主な前近代のイスラーム王朝では、交易、移住、外交によって活発な芸術交流が促進されました。その成果を、これらの精緻を極めた美術工芸品から見て取ることができます。本展の数々の展示品は、中国美術がイスラーム世界の芸術家たちにとって、イスラーム美術が中国の芸術家にとって、大きなインスピレーションをもたらしたことを示しています。

　本展は、４つの章で構成されます。第１章は７世紀に始まる中国とイスラーム世界の文化交流と相互の作用を紹介し、つづく第２章から第４章では、サファヴィー朝、ムガル帝国、オスマン帝国に焦点を当てます。各章では、絨毯を中心とした美術品の意匠およびその製作方法についてとりあげ、イスラーム帝国期に精緻に作られた絨毯の文化的意義、地域を超えた情報の伝達、そして各地域の特色について明らかにします。

　本展は香港故宮文化博物館とドーハ・イスラーム美術館の共同企画です。カタール国ドーハ・イスラーム美術館の100点以上の至宝を中心に、北京故宮博物院および香港故宮文化博物館の貴重な所蔵品とともに展示します。

ドーハ・イスラーム美術館について

　イスラーム美術館（MIA）は、イスラーム世界の貴重な文化財のコレクションを有しています。2008年開館の当美術館は、リニューアルした18室の常設展示室で、14世紀にわたるイスラームの歴史を示す文化財・美術品を紹介しています。同館のコレクションは、マグリブ（アフリカ北西部）から中国、東南アジアにいたる広大な地域を網羅しており、貴重なクルアーン（コーラン）や豊富な挿絵の装飾写本、豪華な絨毯、技巧を凝らした陶磁器やガラス器、金属器などが含まれます。建築家I・M・ペイによる、簡潔ながらも印象的な外観を持つこの建物は、一つの美術館の域を超え、ドーハの都市景観を象徴するランドマークとして知られています。

第１章　中国とイスラーム世界の文化交流

中国とイスラーム世界の交流は唐代（618～907）に遡ることができます。イスラーム教の創始者である預言者ムハンマド（約570～632）は、唐の杜佑（735～812）が著した、百科事典的な制度史の書物『通典』にもその名が記されています。

7世紀半ばには、ペルシア湾と中国南海を結ぶ海上ネットワークが形成されました。ムスリム商人たちは海南島、泉州、広州、揚州といった沿岸都市に交易拠点を設け、内陸の四川地域やさらなる奥地にも進出しました。彼らの海上交易活動は、中国南部の経済に大きな発展をもたらしました。

この種の交易に従事し、中国と諸国間で交易品を運んでいた船舶は、時に海難にも遭いました。こうした沈没船から引き上げられた品々には、中国の陶磁器とイスラームのガラス器がともに含まれており、海を隔て遠く離れた人々の間に歴史的なつながりがあったことを考えさせます。アッバース朝（750～1258）からオスマン帝国（1299～1923）に至るまで、中国の陶磁器やその他の奢侈品はイスラーム世界を魅了し続けました。中国美術に見られる雲文、蓮花文、龍文といった意匠は、イスラーム世界の絵画、陶器、絨毯に多く取り入れられています。

一方で、中国の芸術家や工芸家たちもまた、イスラーム世界の金属器、ガラス器、染織品に着想を得てきました。またイランのカーシャーン地方で産出されるコバルト鉱石は、唐代以後の染付磁器製作には欠かせないコバルトブルー（呉須）を中国の陶工にもたらしました。明代（1368～1644）には、中国人ムスリムの鄭和（1371～1433）が艦隊を指揮して、ペルシア湾からさらに先をも含む大航海が7度にわたり行われました。その記録は、随行員の馬歓が記した『瀛涯勝覧』にまとめられています。明代の陶磁器には、器形、文様、色彩にイスラーム美術の影響が見られ、中国とイスラーム世界との深いつながりを如実に物語っています。

解説　絨毯の製作について

今回展示される絨毯は、パイル技法（結び技法）によって織られています。柔らかくかつ耐久性に富み、装飾的でありながら実用的で、無限のデザインの可能性を秘めています。イスラーム世界を代表する芸術形式である、パイル技法の絨毯は、最も古いもので2300年以上前に織られたものです。製作地は明らかではないものの、ペルシアまたはアルメニアであったと推測されています。

パイル技法による絨毯の地組織は、織機に縦方向に張られた経糸と、横方向に通される緯糸によって形成されます。この経糸に一つ一つパイル糸をめぐらせることでパイル（輪奈、さらにカットすることで絨毯の毛足をつくる）が立ち上がり、やがて絨毯全体の意匠が形作られていきます。この結び目の密度は絨毯の品質を判断するうえでの重要な指標のひとつです。高品質の絨毯には、10センチ四方あたり数千にも及ぶ結び目で構成されるものがあります。この結び目の密度は絨毯の品質を判断するうえでの重要な指標のひとつです。下図は織りの工程で織手の助けとなるもので、口承として受け継がれ、例えば、監督者が織手に向かって「３段目の６つの青い結び目の隣に、赤い結び目を２つ結べ」といった具合に、詠唱や歌で指示を出すこともありました。本展で出品している巨大な宮廷用絨毯の中には、宮廷工房の織工たち10人ほどが数年をかけて製作したものもあります。今回展示される絨毯の、経糸と緯糸からなる地組織は、絹・獣毛、または綿で作られています。表面に出るパイル組織部分は、主に絹または獣毛からなります。最も高品質とされる毛はパシュミナと呼ばれ、ヒマラヤ山脈に生息する山羊の毛から得たものです。絹糸は装飾効果を高めるために金属糸を巻き付けられることもありました。

イスラーム世界では、15世紀後半までに織糸がさらに細くなり、結び目の密度も高まったことで、精緻な意匠を表現することが可能となりました。本展の出典品は、歴史上最も強大な王朝に数えられるサファヴィー朝、ムガル帝国、オスマン帝国の最上級の絨毯であり、王朝の権力を誇示するために、各宮廷は壮麗な宮殿や宮廷儀式にふさわしい巨大な絨毯を製作する必要があったのです。

解説　現代の交通システムの歴史的起源

中国は長きにわたり中央アジアをはじめとする西方の地域と接触していました。漢（紀元前206～後220）の武帝（在位前140～前87）は、騎馬隊の強化を図るため、伝説の名馬を求めて張騫（？～前114）を西域へと派遣し、遊牧民族との同盟を模索させました。それ以前より何世紀にもわたって、中国の商人たちは西域に往来していましたが、この張騫の報告により、漢の朝廷においても、西方の情報が飛躍的に増加しました。

5世紀から6世紀には、中国とササン朝ペルシア（224～651）の間で、使節の往来が頻繁に行われるようになります。北魏から西魏、南朝の梁などの各王朝の朝廷には、ササン朝の使節が訪れ、中国からも隋（581～618）の煬帝（在位604～618）の時代に、隋朝の使節がホスロー2世（在位590、591～628）を訪問しました。ササン朝が滅亡した際には、その王子ペーローズ3世（636～79）が唐（618～907）の朝廷に庇護を求め、長安へと迎え入れられました。

中国の考古学的調査では、新疆、河南、陝西、さらに遠く南では広東などの各地から、ササン銀貨が多数出土しており、その年代は12代のササン朝皇帝の治世にまたがります。これらの貨幣は、中国とイランの間の陸上交易および海上交易が非常に活発であったことの証左です。当時の交易網においてもっとも高値で取引された商品は絹であり、のちに「シルクロード」の名称を生むことになりますが、それ以外にもさまざまな織物、紙、茶、香辛料、鉱物、金属、ガラスなどが盛んに交易されました。

このシルクロード交易において中心的な役割を果たしたのがソグド人です。彼らは現在のウズベキスタンからタジキスタンにまたがる地域、ソグディアナ出身のイラン系民族で、機知に富み陽気で、多言語に通じていました。ソグド商人は、外国の商品や流行、芸術、文化を中国にもたらし、訪れる先々で人々の関心を惹きつけました。ソグド商人の存在は、対話と協力、開放性と包摂性、相互理解と相互利益というシルクロードの精神を体現していたといえるでしょう。

ソグド商人と同じ精神をもって、イスラーム諸国の商人たちも海を渡りました。彼らは東南アジア、インド、中国へと航海し、象牙、瑪瑙、真珠、胡椒、薔薇香水、乳香、織物など、さまざまな品物や珍品を運んできました。10世紀から13世紀には、中国とイスラーム世界の間での海上貿易はかつてないほどの隆盛を見せ、多くのムスリム商人たちが中国沿岸に定住し、宋（960～1279）の朝廷も彼らを「遠来の友」として歓迎しました。こうした友好関係は今日、かつてないほど強固なものとなっています。

解説　イスラーム世界の芸術

イスラームは、預言者ムハンマド（約570〜632）に啓示された聖典『クルアーン（コーラン）』に基づく宗教です。ムスリム（イスラーム教徒）は、一日５回、サウジアラビアにある聖地メッカの方角に向かって礼拝し、またメッカへ巡礼を行います。慈善はイスラームの信仰の中心的な価値観のひとつであり、イスラーム暦の9月に断食を行うことで、自らの人生の恵みを振り返り、困窮にあえぐ人々に手を差し伸べる心を養うために行われます。

現在、世界人口のおよそ25パーセントがムスリムであり、イスラーム世界は時代ごとに形を変えながら、アラビア半島のみならず、スペイン南部から北アフリカ、中央アジア、インド、東南アジア、さらにはその先へと広がりました。聖典『クルアーン』の言語であるアラビア語は、世界中のムスリムが宗教的な目的のために用い、アラブ地域に暮らす人々にとっては日常言語でもあります。

「イスラーム美術」という語は、宗教的・非宗教的を問わず、歴史上のイスラーム世界で製作されたすべての美術作品を包括的に指します。、装飾写本、製本、金属工芸品、陶磁器、ガラス、染織品、絵画、建築などがその主要な表現形式です。モスク（礼拝堂）の内部では人物や動物の描写は見られませんが、非宗教的な作品においてはしばしば見受けられます。

『クルアーン』の一節は、宗教建築や宗教美術の装飾として頻繁に登場します。たとえば、イスラームの信仰告白であり、五行（ムスリムの５つの義務規範）の第一の柱である、「アッラーの他に神はなし、ムハンマドはアッラーの使徒なり」という聖句は、建築物や日用品にしばしば刻まれています。礼拝用敷物もまた、宗教美術の重要な形式です。慈善活動はイスラームの中心的な教えであり、敬虔なムスリムは他の贈り物とともに礼拝用敷物をモスクに寄進してきました。

イスラーム美術の作品の表面は、カリグラフィー（書）、幾何学文、花文、植物文など、さまざまな模様で満たされています。こうした意匠は、イスラーム世界の内外における芸術的交流の中で生み出されたものが多く、その中でも息の長い意匠のいくつかは、潤沢な資金、優れた才能、上質な素材が揃う宮廷工房で誕生しました。

第２章　サファヴィー朝（1501〜1736）

サファヴィー朝のシャー（王）は、235年にわたり、近世イラン史において最も偉大な王朝のひとつを築き上げました。最盛期には、現在のイラン全土に加え、イラク、アゼルバイジャン、トルコ、アフガニスタン、ジョージアなどを支配していました。最も優れた統治者はシャー・アッバース（在位1587〜1629）で、彼は度重なる軍事的勝利、効率的な行政、先見的な都市開発計画、有効な経済再生戦略、そしてヨーロッパやインド亜大陸との商業的な結びつきと交易の活性化を通じて、帝国を繁栄させました。

シャー・アッバースのもとでは、国家が資金を投入した絹産業が莫大な利益を生み出し、それが彼の軍事遠征、統治政策、社会基盤整備計画の資金となりました。また、イラン中部に築いた新都イスファハーンでは、その資金が美術工芸の振興にも活かされました。イランの絹の持つ比類のない光沢は、商品としての多くの魅力を持ちました。シャー・アッバースは、当時軍事衝突を繰り返していたオスマン帝国に対抗する同盟形成のため、絹や貴重な贈り物を用いてヨーロッパ諸国と外交を展開しました。生糸ばかりでなく、ヨーロッパ人はサファヴィー朝の精緻な工芸品、とりわけ絨毯を好みました。

経糸と緯糸双方に絹糸を使用した絨毯は特に高く評価され、より豪奢な効果を求め、絹糸に金属を巻き付けることもありました。16世紀から17世紀にかけてヨーロッパ市場での需要が高まると、イランの織工たちは生産効率を高めるために、絹に代えて木綿を多く用いるなどの工夫を凝らし、密度をやや粗くした織り方を試みました。デザインは簡素になったものの、なおその印象的な魅力は失われることなく、サファヴィー朝の絨毯は競争の激しい国際市場において、常に人気商品であったオスマン帝国の絨毯とも並ぶ競争力を持ち続けました。

またシャー・アッバースによる国際貿易への投資は、中国の陶磁器の流入をもたらしました。とりわけ1622年にサファヴィー朝がペルシア湾の制海権を回復したのち、その傾向が顕著となります。シャー・アッバースは、数百人の中国の陶工をイスファハーンに招き、彼らの知識を現地の陶工に提供させることで、当地の製陶技術を向上させました。中国の豪華な陶磁器は、経済発展を刺激する計画の一部であっただけでなく、シャーの慈善精神を示す手段ともなり、およそ1000点におよぶ美しく精巧な中国の陶磁器を、アルダビールにあるサファヴィー朝の王廟へ寄進しました。

第３章　ムガル帝国（1526〜1857）

ムガル帝国は、３世紀以上にわたって統治を行い、インド亜大陸の大部分を統一しました。王朝の創始者バーブル（在位1526〜30）は、母系はチンギス・ハーンに、父系はティムールに連なります。孫のアクバル（在位1556〜1605）が、領土の拡大と行政改革を通じて、大国へと発展させました。後継のジャハーンギール（在位1605〜27）やシャー・ジャハーン（在位1628〜58）の時代には、世界的にも稀有なダイヤモンドや壮麗な建築物で人々を魅了しました。

ムガル帝国の宮廷絨毯は、その品質、技術、規模、そして製作費において、芸術作品として極めて高い評価を受けています。ムガル宮廷では、絨毯が公的儀式において上座を飾るものとなり、娯楽のための私的空間を仕切る用途にも使われました。アクバルは当時随一の芸術の後援者であり、絵画から絨毯まで多様な芸術分野の発展を促しました。ムガル帝国領内には広範な皇室工房制度が敷かれ、イランから移民した織工の貢献により繁栄しました。

最高級のムガル絨毯には、絹の地経糸と地緯糸に加え、チベット王国で飼育されたヒマラヤ山羊から採れるパシュミナ・ウールが、パイル緯の糸として用いられました。17世紀から18世紀には、イギリス、ポルトガル、オランダの商人が、ラホールやアグラなどで織られたムガル絨毯をヨーロッパの上流階級の顧客に販売し、オランダ人は日本にも絨毯を持ち込みました。また、ムガル帝国は外交の贈答品としても絨毯を活用し、例えばシャー・ジャハーンは新たに即位したオスマン帝国のスルタン、イブラヒム（在位1640〜48）に２枚の礼拝用敷物を贈っています。

1636年にはシャー・ジャハーンの侵攻により、ムガル帝国はインド南部のデカン高原を手中に収めました。1680年代後半、息子のアウラングゼーブ（在位1658〜1707）が、当時唯一ダイヤモンドを産出していたゴールコンダ王国を征服すると、独特の「ムガル＝デカン様式」の絵画が発展し、絨毯の意匠にも影響を与えました。デカン地方の文化の多様性は、デカン諸宮廷の折衷的な美術表現に反映されており、その創作の発想の源の一つには中国の陶磁器や絹織物が挙げられます。

第４章　オスマン帝国（1299～1923）

その創始者オスマン1世（在位1299～1324）にちなんで名付けられたオスマン帝国は、600年以上にわたり存続し、最盛期には世界史上最大級の領土を支配していました。 15世紀のスルタン・メフメト2世（在位1444～46、1451～81）の治世には、オスマン帝国はコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼすほどの強大な勢力と領土拡張欲を持つようになりました。第10代のスルタンであるスレイマン大帝（在位1520～66）は、多くの先達や後継者がそうであったように、イスタンブールのトプカプ宮殿から統治し、オスマン帝国の最も栄光ある時代を築きあげました。

オスマン帝国の宮廷工房では、皇族や高官のために卓越した芸術作品が製作されました。工房で作られた最も有名な製品は織物で、特に錦や金糸織物、サテン、ベルベットなどの織物が有名です。イスタンブールでは、織物の同業者組合が、国内需要や輸出、外交贈答品のために織物を供給しました。この収益性の高い国際的な織物交易は、オスマン帝国とサファヴィー朝の戦争の一因ともなりました。戦時であれ平時であれ、イランとの交流はオスマン帝国の芸術に影響を与え、なかでも西アナトリア地方の絨毯製作の中心地であるウシャクのメダリオン絨毯にその痕跡が見られます。

絨毯は、宮殿、モスク、邸宅を飾るために使用され、オスマン帝国の織物産業の重要な一部でした。最高品質のオスマン絨毯は宮廷工房で生産され、その中でも特に礼拝用敷物が優れていました。これらの宮廷絨毯は、しばしば絹と毛を組み合わせて作られ、陶磁器や装飾写本に見られるような複雑なデザインを再現するために、非対称のペルシア結びが用いられました。首都イスタンブールから離れたアナトリアやコーカサス地方では、トルコの対称結びが使用され、幾何学文や様式化された動物文が織り込まれました。

中国美術の意匠も、絨毯や北西トルコで焼成されたイズニク陶器など、オスマン帝国の芸術に取り入れられました。中でも雲文、蓮花文、牡丹文は、元代から明代（1279～1644）の陶磁器や絹織物から採用され、オスマン帝国社会の上流階級に愛されました。また、ステータス・シンボルであった中国の陶磁器は、婚礼などの重要な場で食器として使用されました。景徳鎮の陶工たちはオスマン帝国向けに生産し、これらの品々は、時にはイスタンブールの宮廷工房で宝石を散りばめた台座が加えられることもありました。

解説　ダマスカス・ルーム

ドーハ・イスラーム美術館（MIA）の見どころの一つが、ダマスカス・ルームです。1817年に建てられたダマスカスの富豪の邸宅にあった応接室でした。それは400点以上の木板と立体彫石を用いて美術館内に絶妙なかたちで再現されています。

香港故宮文化博物館では、このMIAのダマスカス・ルームをデジタル展示しています。シリアの首都ダマスカスは、古代ギリシャ、ローマ、ビザンチン、そしてイスラーム文明の足跡を残す、世界で最も古くから人が住み続けている都市の一つです。ウマイヤ朝（661～750）は、預言者ムハンマド（約570～632）が逝去して29年後に成立し、ダマスカスを首都としました。市の中心部には、現在も世界最大級のモスクが建っています。ダマスカスは、ラクダで約40日を要すメッカへの巡礼の出発点で、17世紀までに、国際商業の中心地となりました。富裕商人の豪華な邸宅は、社交、商談、集会などの半公共的な場として利用され、この応接室も、かつては訪問者を温かく迎え、もてなす空間でした。

ダマスカス・ルームは、木製の花柄や幾何学模様の装飾で満たされています。装飾には金箔、錫箔、鏡、その他の反射素材が使われているため、光の加減で部屋の雰囲気が変化します。オスマン、ペルシア、インド、ヨーロッパのモチーフが組み合わされた模様は、ダマスカスの多文化的な特徴にふさわしいものです。さらに、部屋の壁にはカリグラフィー（書）による装飾も施されています。詩やアッラーの御名の銘文が、部屋に情緒的な美しさを漂わせています。そのなかの詩の一節には、「安全な丘の上の居処から、優しいナイチンゲールが祝福を歌い、幸福と至福の吉報を告げていた」とあります。